

Gallery PARC
Art Competition
2019

#01_2F

2019年7月5日|金 __ 7月21日|日 Gallery PARC 2階展示室

部屋と外 *a room and outside*

加藤 舞衣 KATO MAI

#01_4F

2019年7月5日|金 __ 7月21日|日 Gallery PARC 4階展示室

キャンプができたらいいな。 *I wish I could camp.*

坂口 佳奈・二木 詩織 SAKAGUCHI KANA / FUTATSUGI SHIORI

#02_2F~4F

2019年7月26日|金 __ 8月11日|日 Gallery PARC 2~4階展示室

アンバー・ランド *Amberland*

洪 亜沙 HONG AHSA

Gallery PARC Art Competition 2019

実施概要

本展は広く展覧会企画を公募し、厳正な審査により選出されたプランを展覧会として実施する、コンペティション「Gallery PARC Art Competition」の2019年の採択プランによる展覧会です。2014年から毎年開催により6回目を迎える本年は、応募総数64プランから、平田剛志(美術批評)、勝冶真美(京都芸術センタープログラムディレクター)の2名の審査員を交えた厳正な審査により、採択された3つの展覧会を前期・後期に渡って開催いたします。3フロアに渡る展示室を持つPARCの空間を活かした展開として、本年は前期となる7月5日から7月21日までの[#01]では、2階展示室で加藤舞衣による個展「部屋と外」を、4階展示室で坂口佳奈・二木詩織による展覧会「キャンプができればいいな。」を同時開催することで、2つの個展を構成します。また、後期となる7月26日から8月11日までの[#02]では、パルクの全フロアを会場に、洪亜沙による個展「アンバー・ランド」を開催いたします。

2014～2018年 募集結果・採択プラン

- 2018年応募:66プラン 森岡真央「ママ、きいてちょうだい」、平野泰子「呼びかけられる」
2017年応募:31プラン 近藤洋平「whereabouts」、松宮恵子「湖/畝を旅する」、井上裕加里「堆積する空気」
2016年応募:56プラン 湯川洋康・中安恵一「豊穰史のための考察 2016」、寺脇扶美「紫水晶からの手紙」、嶋春香「MEET (MEAT)」
2015年応募:34プラン 田中秀介「私はここにいる、あなたは何処かにいます。」、中尾美園「図譜」、明楽和記「白」
2014年応募:44プラン 薬師川千晴「絵画碑」、むらたちひろ「時を泳ぐ人」、松本絢子・山城優摩、森川穰「A Sense of Mapping」

2019年 採択プラン・会期概要

#01_2F

2019年7月5日|金__7月21日|日 Gallery PARC 2階展示室

部屋と外 *a room and outside*

加藤 舞衣 KATO MAI

#01_4F

2019年7月5日|金__7月21日|日 Gallery PARC 4階展示室

キャンプができればいいな。 *I wish I could camp.*

坂口 佳奈・二木 詩織 SAKAGUCHI KANA / FUTATSUGI SHIORI

#02_2F~4F

2019年7月26日|金__8月11日|日 Gallery PARC 2~4階展示室

アンバー・ランド *Amberland*

洪 亜沙 HONG AHSA

※各展覧会とも開場は11:00~19:00(金曜日のみ11:00~20:00)・月曜休廊

会場・アクセス・問い合わせ

主催 Gallery PARC [グランマーブルギャラリー・パルク]

会場 Gallery PARC [グランマーブルギャラリー・パルク] 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F MAP

アクセス 地下鉄烏丸線「四条」駅・阪急京都線「烏丸」駅22・24番出口より徒歩7分。地下鉄烏丸線・地下鉄東西線「烏丸御池」駅より徒歩7分。室町通・六角通 北東角 室町通側入り口より2Fへ

問い合わせ Gallery PARC (正木・村田・岡田) 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F

TEL= 075-231-0706 FAX= 075-231-0703 MAIL= info@galleryparc.com HP= www.galleryparc.com

Gallery PARC Art Competition 2019

審査員による総評

6年目となる本年の公募は、国内外から64件のプランが集まりました。

例年以上に質の高いプランが多く難しい審査となりましたが、長時間に渡る審査を経て、フロア全体を使った1プランと各フロアを使用した2プラン、計3名(組)を選出しました。選外のプランにも魅力的なものが多くありましたが、またどこかでご一緒できる機会を楽しみにしています。

今年の応募プラン全体の印象は、言葉の抽象性、難解さでした。今に始まったことではありませんが、展覧会タイトルやエントリースートには、硬い言葉や専門用語が並び、学術論文を思わせるプランも散見されました。

そもそも展覧会とは誰に向けて作られるのでしょうか。美術とは美術館学芸員や大学の研究者などアカデミズムに向けてつくり、見られるものなのでしょうか。

言うまでもなく抽象的な言葉でしか語れないこともあります。結果的に入選したプランは作品をどのような展示で見せるのかが具体的でわかりやすく記述され、清新な驚きと感銘を与えてくれました。

洪亜沙 「アンバー・ランド」

作家の創作による物語「アンバー叙事詩」をもとにした遺物や考古資料による博物館展示、アイコンをテーマにした宗教的空間による2部構成の展示プランは、本コンペ中、類を見ない世界観でした。セカイ系にも通じる神話的な物語と博物館展示とが緻密に融合され、現実と虚構、過去と現代の境目を曖昧にする多視点的な構成には瞠目しました。新たな年号＝歴史が始まる本年、洪亜沙はどのような物語＝歴史を虚構空間化するのでしょうか。

加藤舞衣 「部屋と外」

加藤のプランは、部屋の壁に貼られたテープ跡、路上に落ちているものをモチーフにしたリトグラフ版画です。誰もが見落としている壁面や路上の痕跡、経年変化という時間作用にリトグラフの化学作用による製版を見出す加藤の視点には版画的な思考が息づいていました。デジタル社会の現代、壁や路上に残されたアナログなグラフィティの痕跡をリトグラフへと変換する加藤の版画に私たちは何を発見するのでしょうか。

坂口佳奈・二木詩織 「キャンプができればいいな。」

東京在住の坂口佳奈と二木詩織の二人は、制作した作品を搬入するのではなく、東京から京都へ向かう道中で制作したものをインスタレーションやパフォーマンス、絵画として展示するプランです。特筆すべきは旅行計画でした。キャンプで焚き火や釣りをし、サービスエリアでソフトクリームを買い、京都の金閣寺でセルフイーを撮るなど、およそ展覧会とはかけ離れたナンセンスさが爽快でした。YouTuberが実験や検証をする「やってみた系」動画のようなプランですが、果たして彼女たちは無事にキャンプができるのでしょうか。夏の京都、二人の無事の到着を心待ちにしています。

平田剛志 (美術批評)

本コンペティションの審査を担当して3年目となりました。年々、審査の難しさを感じています。それは応募者の世代がこれまで以上に幅広く、またこれまで絵画が多い印象だったメディウムも、より多様になってきているということもありますが、「審査」という行為そのものの曖昧さ、危うさのようなものに今更ながら気づかされたからかもしれません。

熱のこもったアーティストからのプランを前に、何か統一した基準をもって審査することはますます難しく、審査は(毎年のことですが)長時間に及びました。最終的には、「見たい」という審査員のシンプルな欲求に対し、その背中をぼんと押ししてくれるような企画を選出することとなりました。今回選出した3つのプランからは、どれもそういった力を感じました。

自身がつくりだした架空の物語を作品化するという洪亜沙さん。彼女のつくり出そうとする確固たる虚構のありようが魅力的ですが、私たち人間がいかに物語を必要とするのかについて考える機会ともなりそうです。加藤舞衣さんは、壁に残るテープの痕や道に落ちているものなど、人知れずそこにあるものに目を向けます。それらがアーティストを介して展示空間に持ち込まれるとき、鑑賞者それぞれの忘れられていた物語が立ち現れるでしょう。坂口佳奈さん・二木詩織さんは、二人が住む東京から京都までを実際に移動することから作品を制作するという。新幹線だと2時間程、もはや当たり前となったこの距離と時間をどう想像しなおせるのでしょうか。

まだ見ぬものたちが一体どんな展示となってあらわれるのか、今から楽しみにしています。

勝治真美 (京都芸術センタープログラム・ディレクター)

Gallery PARC Art Competition 2019

#01_2F

2019年7月5日|金 __ 7月21日|日 11:00~19:00
月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで Gallery PARC 2階展示室

部屋と外 *a room and outside*

加藤 舞衣 KATO MAI



《wall_3》 2018 いづみ紙にリトグラフ 760×1120mm
*本展DM使用画像

ステートメント

私の作品に描かれているモチーフは、道端に落ちていた踏み潰された花びらや誰かが捨てた空き箱やビニール袋、壁に貼られたままになって長年放置されていたテープ、使われた後のガーゼやほつれた糸などである。自作の中で一番表現したいことは、物の在り様であり、支持体の中に時間が流れている様な景色と空間である。物本来を見ることに焦点を当てて制作を進めていく中で、「物は時間の経過や自然の力や人間の力で形や色が変化していつている」ということに興味を持った。

自作が目指しているのは、物そのものを主役とし、自分自身の感情や想いよりも、物の存在をダイレクトに見せることである。そのため、「インク=物」「紙=空気」に見立てて、物と空気の溶け合いを「紙とインクの対話」で表現している。

展覧会のコンセプト

自作の中で一番表現したいことは、物の在り様であり、支持体の中に時間が流れている様な景色と空間である。日常生活において、時間の経過が感じられるもの(朽ちた花びらや道端に捨てられたゴミや壁に貼られたテープ、ほつれたガーゼなど)をモチーフに制作してきた。私の選択しているモチーフは、誰もが日常生活において目にはしているが、目にしていることに気づいてない、忘れ去られてしまっているものである。

道端に落ちていたものシリーズでは、不特定多数の人や自然の力で朽ちていったものを描いている。私が見かけた場所から明日にはもうなくなっているかもしれないようなもの、そこにあることに気づいている人があまりいない。しかし、みんなどこかでみたことあるようなものである。そういったものを絵画にすることで鑑賞者は何を感じるのか。

私が使っていた場所を、共有して使っていた人たちの痕跡や性格、手癖が違う場所に貼られて、作品を見る人がいて、時間が生まれる。

自作をきっかけに、新たなストーリーが生まれるような展示にしたい。

略歴

加藤 舞衣

1994 大阪府出身
2017 京都精華大学芸術学部メディア造形学科版画コース卒業
2015 フィンランドトゥルクアーツアカデミー 交換留学
2019 多摩美術大学大学院美術研究科絵画学科 卒業

展覧会

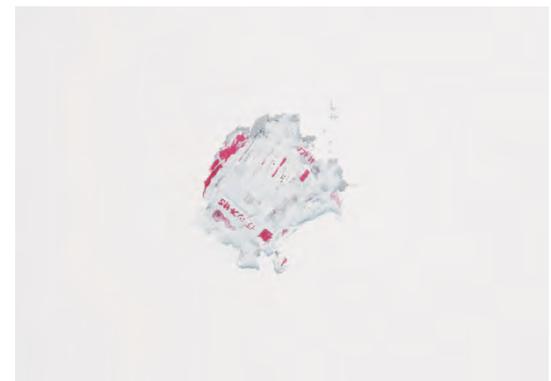
2019 第20回「1_WALL 展」(ガーディアンガーデン / 東京)
2018 アートフェア東京2018 Future Artists in Tokyo "スイッチルーム" (東京国際フォーラム / 東京)
・ 窓辺とブランケット (ソーイングギャラリー / 大阪)
2017 京展 (京都市美術館 / 京都)
・ TAMABI SELECT vol.4 (多摩美術大学八王子キャンパスアートテーク / 東京)
2016 夜昼プリズム [池上真由・加藤舞衣 二人展] (Kara-s / 京都)
2015 work in progress (トゥルク市 / フィンランド)

受賞歴

2017 京展 入選
2019 第20回「1_WALL」ファイナリスト



《in room》 2018 いづみ紙にリトグラフ 420×310mm



《empty box》 2016 いづみ紙にリトグラフ 522×740mm

Gallery PARC Art Competition 2019

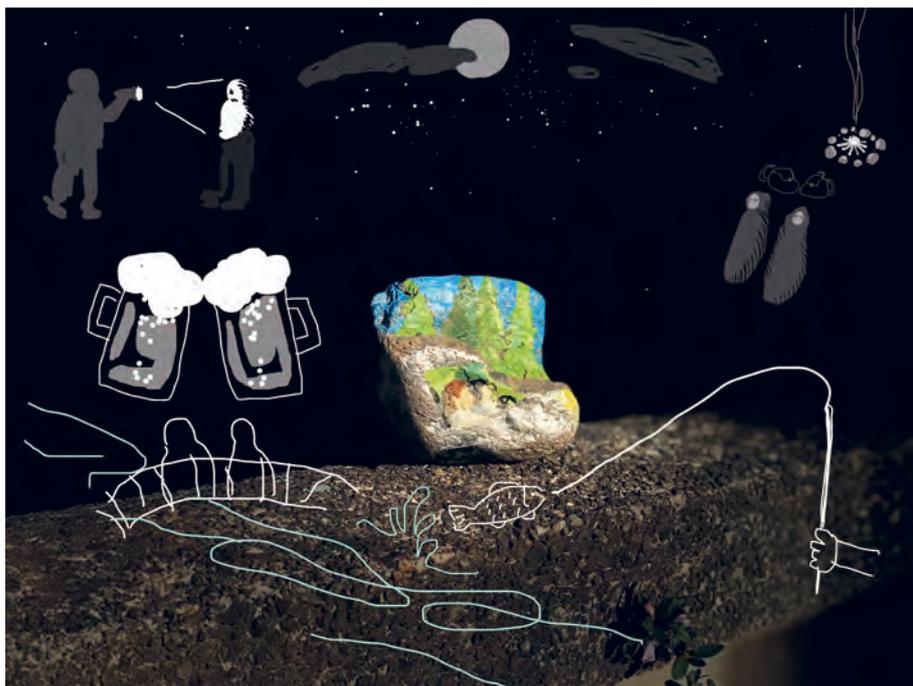
#01_4F

2019年7月5日|金 __ 7月21日|日 11:00~19:00

月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで Gallery PARC 4階展示室

キャンプができたらいいな。 *I wish I could camp.*

坂口 佳奈・二木 詩織 SAKAGUCHI KANA / FUTATSUGI SHIORI



*本展DM使用画像

ステートメント

新しい景色を絵画で表現できないかと考え制作しています。私は、空間のずれや絵の具の重なりによって私たちが普段生活している現実とは異なる時間を表現できるかもしれないと考えています。なぜなら、それらは別々な時間を共有して存在していると思うからです。そのずれや重なりをきっかけにものごとを新しい目線で捉えもっと柔軟に世界と関わりを持ちたいと感じています。(坂口)

自身の体験をどう切り取るか、また編集するかというのが作品のテーマです。例えば友達と旅行に行ったことを思い出しながら地図を描くパフォーマンスをしたり、それを映像にしたりしています。その中で、自分しか知らない情報を作品に盛り込んだり説明を省いたりすることもあります。当然そうすると作者である私と観客の間に情報量の差が生まれます。最近、飼っている犬を見て、この犬には言葉が通じないんだと思って驚きました。この犬に何かを伝えることはできない。でも犬は撫でてほしそうにこちらを見てくることもあるしひざの上で寝ることもあって、その時私は犬の気持ちを察しようとして思い込みで接します。「この犬に何かを伝えることはできない」けど言葉があるからといって人間同士はコミュニケーションを取れている、何かを伝えていると断言できるのでしょうか？お互いの情報量に差があることが当たり前なのだとすることを考慮し、観客と自分の間の距離を作品にしたいと考えています。(二木)

展覧会のコンセプト

旅、距離、時間をコンセプトの作品制作をしたいと考えています。私たちが住んでいる土地から京都に到着するまでの距離や道中も記録にとり作品として発表したいです。そのために、まず京都へ行くこと計画します。それに基づいて出発し、道中記をつけていきます。

略歴

坂口 佳奈

- 1991 熊本県生まれ
- 2017 武蔵野美術大学造形学部油絵学科A コース卒業
- 2019 武蔵野美術大学造形研究科修士課程美術専攻油絵コース修了

展覧会

- 2013 トリアグラム展(武蔵野美術大学芸術祭 / 東京)
- 2015 GOLDE NAGE(武蔵野美術大学芸術祭 / 東京)
- 2016 Sound of Silence(武蔵野美術大学課外センター / 東京)
- 2017 武蔵野美術大学卒業・修了制作展(武蔵野美術大学 小平キャンパス / 東京)
 - ・ 東京五美術大学連合卒業制作展(国立新美術館 / 東京)
 - ・ アタミアートウィーク2017(ツイキレンタルスペース / 静岡)
 - ・ 理化学研究所展示プロジェクト2017(理化学研究所・横浜キャンパス / 神奈川)
- 2018 克服展(サンクトペテルブルク / ロシア)
 - ・ Slide, Flip, and Turn(武蔵野美術大学図書館 / 東京)
- 2019 武蔵野美術大学卒業・修了制作展(武蔵野美術大学 小平キャンパス / 東京)
 - ・ 東京五美術大学連合卒業制作展(国立新美術館 / 東京)
 - ・ KISO PAINTINGS vol.3 夜明けの家(大銭屋 / やぶはら 長野)

賞歴

- 2017 武蔵野美術大学卒業制作展優秀賞



《Flat1》2016 油絵の具、カンヴァス 2273×1818

二木 詩織

- 1993 神奈川県生まれ
- 2017 武蔵野美術大学造形学部油絵学科Bコース 袴田クラス 卒業
- 2019 武蔵野美術大学造形研究科修士課程美術専攻油絵コース修了

展覧会

- 2019 武蔵野美術大学卒業・修了制作展(武蔵野美術大学 小平キャンパス / 東京)
- 2017 青春スリーポイント計画(Art Center Ongoing / 東京)
 - ・ 武蔵野美術大学卒業・修了制作展(武蔵野美術大学 小平キャンパス / 東京)
- 2015 個人的な生活 緩やかな断絶(ギャラリーmonogram / 東京)
 - ・ 変な話なんだけど(武蔵野美術大学 課外センター / 東京)
 - ・ 私たちが偽りのない何かに出会うための方法(武蔵野美術大学オープンキャンパス / 東京)
 - ・ 小東京☆銀河 vol.8 品出し(府中卸売センター / 東京)
- 2013 ヤマニキ展(武蔵野美術大学 / 東京)



《untitled》2019 映像、観葉植物等のインスタレーション 撮影:加藤 健

Gallery PARC Art Competition 2019

#01_2F~4F

2019年7月26日|金 __ 8月11日|日 11:00~19:00
月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで Gallery PARC 2~4階展示室

アンバー・ランド *Amberland*

洪亜沙 HONG AHSA



《城》2018 紙、アクリル、スタイロフォーム 400×400×400mm
*本展DM使用画像

ステートメント

現実と虚構の境目を曖昧にしていくような作品を制作している。人種や習慣などからくる、人々の見方の違いや、時代による変化に着目し、物事を多視点的に捉えるように心掛けている。

私の作品の中には私の空想の物語がある。その物語を、長らく美術の主題であった「歴史」や「宗教」と結びつけ、現実の空間から切り離された舞台装置のようなものを作っている。

矛盾を含んだ現実と虚構を同時に捉えた世界を表現することに渴望を抱き、制作している。

フランスの小説『日々の泡』の前書きから引用する。

その例証がここに展開する数ページで、お話は隅から隅まで想像で作りあげたものだからこそ全部ほんとの物語になっているところが強みだ。物語のいわゆる現実化とは、傾斜して熱っぽい気分で、ムラ多くねじれの見える平面上に現実を投影することだ。

(ボリス・ヴィアン著 曾根元吉訳『日々の泡』新潮文庫)

展覧会のコンセプト

私たちは常に何かの社会や時代に繋がれているが、それらには必ず外部がある。その外部が見えた時、自分が立つ土地は急に脆くなる。同じことはこの世界そのものについてもいえる。世界の外部を少しでも想像しようとすると、この世界が存在しているのかわからなくなるときがある。

この浮遊するような感覚は、テーマパークに来たときの感覚と似ている。来場者はしばしば、テーマパークの外側を知っていながら、内側の世界に没入してしまう。

今回の展覧会では、架空の歴史や宗教をつくりあげるが、それは別の現実をつくるということではない。テーマパークでの夢うつつなのである。

略歴

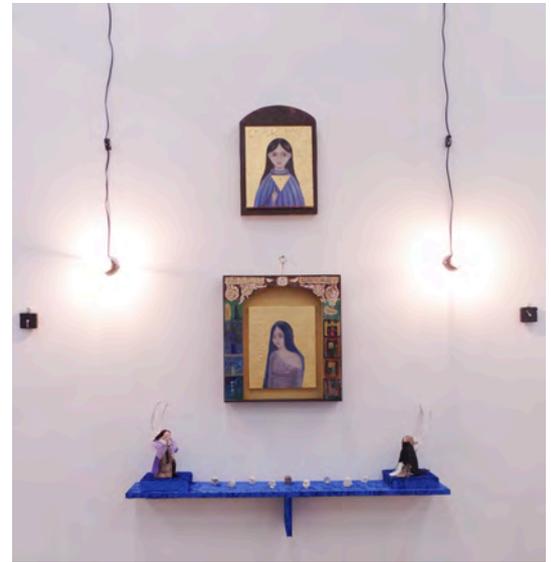
洪亜沙

1996 大阪府生まれ

2018 嵯峨美術大学 芸術学部造形学科 油画分野 卒業
嵯峨美術大学 大学院芸術研究科 在学

展覧会

- 2017 one room (嵯峨美術大学 / 京都)
SAGA DASH 2017 (Art-Space MEISEI / 京都)
Joyful (Art-Space MEISEI / 京都)
- 2018 うのぜみ2018 (Steps Gallery / 東京)
第21回JAALA国際交流展 (東京都美術館 / 東京)
les signes 2018 (Oギャラリーeyes / 大阪)
- 2019 On the Steps 2019 (Steps Gallery / 東京)



《イランの昇天》2019 木、油彩、アクリル、電球、粘土、布 サイズ可変



《思い出(海)》2018 400×605mm 木、油彩、ペン、鉛筆



《アンバー叙事詩(vfx)》2018 木、アクリル、粘土、セメント サイズ可変